



👁️👁️ みどころ

1980年5月の「光州事件」は韓国現代史の汚点だが、私たちは何故その姿を知ることができるの？ 1989年6月4日の中国の「天安門事件」では、戦車の前に立つ学生の姿が全世界に発信されたが、戒厳令の下、市民に発砲する全斗煥軍事独裁政権の実態とは・・・？

その映像を全世界に伝えたのは1人のドイツ人ジャーナリストだが、彼をソウルから光州に乗せていったタクシー運転手がいたことが本作によって判明。彼はいかなる使命感でそんな大きな仕事を・・・？

その発端は、本作が描いたように単なる大金目当てだったらしいが、その中に見る人間の成長とは・・・？ ユーモアいっぱいながら、次第に感動と涙を誘っていく観客動員1200万人の大ヒット作に注目。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■今は南北首脳会談！1980年5月は光州事件！■□■

2018年4月27～28日のテレビと新聞は、北朝鮮の金正恩（キム・ジョンウン）委員長と韓国の文在寅（ムン・ジェイン）大統領が握手をし、手を繋いで軍事境界線を行き越える姿、そして、共同記者会見で両者が南北の統一と平和を熱く語る姿のニュースで埋め尽くされた。1950年から53年の朝鮮戦争は悲惨だったが、「停戦協定」成立後の北と南の復興・繁栄のスピードは、当初は北の方が優位だった。しかし、その後は圧倒的に南が優位に。1980年にソウルで運転手をしていた本作の主人公マンソプ（ソン・ガンホ）が語る言葉によってもそれは明らかだが、韓国の歴代大統領の運命は皆、悲劇的。現在の文在寅大統領は、故・盧武鉉（ノムヒョン）大統領の秘書室長だったが、盧武鉉は

自殺。盧武鉉大統領の後を受けた保守系の朴槿恵（パク・クネ）大統領は現在裁判中だ。

1979年10月26日に起きた朴正熙（パク・チョンヒ）大統領の銃撃暗殺事件後、軍事政権を率いた全斗煥（チョン・ドゥファン）大統領の下で、1980年5月に起きたのが光州事件。韓国は今、保守系と革新系が政権交代をくり返しているが、それ以前は軍事政権と野党との戦いが凄まじいものだった。その最大の悲劇が、光州事件。私はそれを『光州5・18』（07年）（『シネマ19』78頁）等で詳しく知ったが、本作のパンフレットにも、秋月望氏（明治学院大学教授）の『光州事件』をめぐる韓国現代史、桑畑優香氏（ライター・翻訳者）の「光州で何が起きたのか。体験者が語る『真実』」という2つのCOLUMNがあるので、これは必読！

2018年4月の南北首脳会談はたしかにビッグニュースだが、それが今後どう展開、進展するかは全くわからない。それと同じように1980年5月に起きた光州事件もまだまだ未解明な部分が多く、文在寅大統領は、韓国国防部の下に特別調査委員会を立ち上げている。今や光州事件は「国家転覆の陰謀」や「北朝鮮の煽動による暴動」ではなく、「民主化運動の中で起きた悲劇」だという本質は明らかになっている。そんな事件をテーマにした本作を、南北首脳会談という歴史的ニュースが流れるときに鑑賞できたことに感謝！

■□■まるで正反対！一方はカネのため、他方は使命のため！■□■

第90回アカデミー賞の韓国代表作品となり、2017年には韓国動員1200万人を突破する大ヒット作になった本作は、2人の主人公の自己紹介（？）から始まる。本作のパンフレットには「韓国のタクシー1980」があり、1980年当時の韓国は地下鉄1号線だけで、市内のいたるところが2号線の工事で掘り返されていたため、大衆の乗り物と言えばバスとタクシーだったことをはじめ、当時のタクシー事情が詳しく解説されている。本作の主人公マンソプはソウルで働く個人タクシーの運転手だが、11歳の娘と二人暮らしをしている狭い家を見ても、小さい靴をかかとを踏みながら履いている娘の姿を見ても、その貧乏ぶりがすぐにわかる。そのうえ、愛する妻には先立たれているようだから、彼はどんな人生の目標を持って生きているの・・・？

とりあえずは、今日明日の生活のため。それ以上の意識を持っていないことは明らかだから、学生たちがソウル市内で「全斗煥独裁反対」、「戒厳令を解除せよ」と叫びながらデモ行進していても、それには批判的。そればかりか、自分のタクシーの営業がままならぬとあって、「学生は勉強するのが本分だろう」とおかんむり。確かにそれはそうだが、全斗煥の独裁ぶりをマンソプのように黙って見ているだけでホントにいいの・・・？

他方、東京の記者仲間から韓国の光州ですごい事件が起きているらしいと聞き、ジャーナリスト魂に火をつけられたのがドイツ人の記者ピーター（トーマス・クレッチマン）。特ダネ欲しさに彼はその足で一人ソウルへ飛んだが、すでに光州への道路は閉鎖されているらしい。そこで「頼りになるのはカネ」とばかりに、「通行禁止時間までに光州に行ったら

10万ウォンを払う」と言うのと、すぐにソウルのタクシーが乗って来たからラッキー。そして、面白いのは、ここがお行儀のいい日本では考えられないことだが、昼食時にその運転手の話を聞いたマンソプが、ちゃっかりその話を横取りしたこと。昼食もほどほどに、「俺が先ほど予約した運転手だ」と名乗り出ると、事情のわからないピーターは、10万ウォンで光州まで行く運転手だと早とちりしてマンソプのタクシーの中へ。マンソプも、ピーターがなぜ光州まで行けば10万ウォンなのかを詮索しないまま、一路光州へ……。

このようにその思惑は、一方はカネのため、他方はジャーナリスト魂のためだから、そんな正反対の2人はいつかケンカ別れするのでは……？

■□■ 『光州5・18』 VS本作の視点をしっかりと！ ■□■

韓国では、南北分断や日本の植民地統治時代を描いた名作も多いが、金大中の誘拐事件を描いた『KT』（02年）（『シネマ2』97頁）、1979年10月26日に発生した朴正熙大統領の暗殺事件を描いた『ユゴ 大統領有故』（06年）（『シネマ16』126頁）等の「歴史もの」の傑作も多い。そして、1980年5月の光州事件を描いた名作が『光州5・18』だが、その原題は『華麗なる休暇』。これは1980年5月18日午後3時に戒厳軍によって開始された作戦名。すなわち、クオナム路を埋めつくしたチョンナム大学の学生や市民たちに対して、武装ヘリや戦車を含む2万人以上の国軍を動員して、その鎮圧を命じた作戦の名前だ。その姿は『光州5・18』や本作でしっかり鑑賞したいが、中国で1989年6月4日に起きた「天安門事件」以上の軍事衝突は、まさに悲劇だ。国や国民を守るべき軍隊（国軍）が国民に銃を向けるとは、一体ナニ？

『光州5・18』は、主役で登場する4人の男女を通じて光州事件を3種類のヒューマンドラマから描いていたし、韓国の国民的俳優たるアン・ソンギ扮する空挺特別部隊予備大佐率いる市民軍が道庁に立てこもって、戒厳軍と対峙する姿は、まさに1789年のフランス革命を彷彿とさせるものだった。しかし、その悲惨な結末は……？また、同作ではタクシー運転手のカン・ミヌ（キム・サンギョン）の同僚のインボン（パク・チョルミン）と、自らをチンピラと称するインボンの相棒ヨンデ（パク・ウォンサン）の2人が「道化役」して大きな役割を果たしていたが、本作でもそれと同じように、光州のタクシー運転手のファン・テスル（ユ・ヘジン）と、英語の通訳をする大学生ク・ジェシク（リュ・ジュンヨル）が、「道化役」として大きな役割を果たすので、それに注目！

その他、韓国を代表する俳優ソン・ガンホの出演によってユーモア色豊かに作られた本作だが、後半からラストにかけては、光州事件の悲惨さとその社会問題提起性が深刻になっていく。そのため、2008（平成20）年5月17日付『大阪日日新聞』の『光州5・18』の私の評論を掲載しておくので、本作の鑑賞については、『光州5・18』との対比をしっかりと。

映画は楽しむもの？
それとも勉強の素材？

日本人にはなじみの薄い韓国近代史の闇「光州事件」が今明らかに！
一九八〇年五月、日本はカンヌでの『影武者』の最高賞受賞に沸いたが、その時朝鮮半島最南端にある光州では「華麗なる休暇」という名の血なまぐさい作戦が展開中！

南北に分断された韓国では、七九年十月の朴正熙大統領暗殺後、金大中・金泳三・金鐘泌の「三金」が表

舞台へ返り咲き
民主化ムードが

高揚するも、クーデターで権力を掌握した全斗煥將軍（後の大統領）が八〇年五月、非常戒厳令を敷いたため情勢は一挙



光州 5・18

日韓新時代の中、あの闇に光を！

主人公たちへの鎮魂歌は？

に緊迫。武器を奪った「市民軍」は戒厳軍を一度は撤収させたが、在韓米軍が韓国軍の投入を容認したため情勢は急転換！

時は流れ、盧武鉉の退場と未来志向の大統領李明博の登場で日韓新時代が到来する中、二十八年前のあの事件を真正人は韓流特有の美男美女

の純愛と兄弟愛を、また二人の狂言回し役のパワーに注目。歴史として学びたい人は、平穩な暮らしを享受していた市民たちがなぜデモ隊に加わったの？なぜ戒厳軍に抵抗したの？なぜ命を賭して道庁に籠城したの？それをじっくりと思索したい。

改革や刷新を求める初期の民衆蜂起が悲劇的結末を迎えるのは歴史的教訓。それは光州事件でも同じだが、映画が訴える

北京五輪は約八十日後。チベットの騒乱事件を正確に総括するために、今あの事件の再検討が不可欠では？

■□■ 2人の道化役（？）に注目！成果は彼らのおかげ！ ■□■

本作の主人公はあくまでマンソプとピーターの2人。また最後の「主人公」は、ピーターが撮影した光州事件のフィルムになる。しかし、韓国の一地方都市にすぎない光州にマンソプのタクシーで無理矢理乗り込んできたピーターが、戒厳令の下、催涙ガスと実弾が飛び交う中で取材を敢行し、その実情をカメラに収めることができたのは、2人の道化役（？）のおかげだ。10万ウォンをもらえば滞納していた家賃を全額支払うことができる。そう考え、「カネのため」にピーターを光州まで乗せてきたマンソプは、ピーターを光州まで乗せれば、あとは帰るだけ。危険な取材のお手伝いは御免だ。そう考えていたから、学生のデモ隊に入っていた大学生のジェシクたちにピーターを委ねると、自分は1人だけでコソコソとソウルに向けて出発……。しかし、光州でタクシー運転手をしているテスルたちがデモ隊に加わったり、ピーターを手助けしている姿を見ると、少しずつマンソプの姿にも変化が……。本作中盤から後半にかけては、ノンボリの一市民にすぎなかったマンソプが、ピーターはもちろん、ジェシクやテスルたちが命をかけて光州の民主化のために闘っていく姿を見て、少しずつ変化していく姿に注目したい。

「大学歌謡祭に出たくて大学に入ったんだ」という陽気な大学生・ジェシクは、自分の英語がピーターに通じたことに大喜び。また、情に厚い光州のタクシー運転手・テスルは、ソウルに帰れなくなったマンソプのために、無償で宿や食事を提供する親切ぶりだ。しかし、戒厳部隊の市民への攻撃が強化され、さらに、外国人ジャーナリストが密かに光州に潜入し、ニュースを国外に流すための映像撮影をしているとの情報が戒厳部隊に流れ、私服警察がピーターの逮捕のために動き始めると、マンソプ、ピーターはもちろん、ジェシクやテスルたちの危険も大きくなることに。そんな中、4人は私服警察に追い詰められ、ジェシクは拘束された上で、事件を写したフィルムを返せば解放すると言われる状況に陥ったが、そこでジェシクがとった、あっと驚く行動とは……。？私は単なる一大学生が何もこんな英雄的な犠牲性を発揮する必要はないと思うのだが、そこは韓国流。涙なしには見られない、ジェシクの感動的シーンをしっかり味わいたい。

■□■ 本作のカーチェイスで、はじめて涙 ■□■

近時、スパイものやアクションものでは、ハリウッドでも日本でも中国でも、ド派手なカーチェイスが売り物になっている。大阪ロケを多数敢行した『マンハント』(17年)では、水上カーチェイスが見ものだった。しかして、本作では、光州での取材を終えた2人がマンソプのタクシーに乗ってソウルに帰る途中、思わぬカーチェイスのシーンが登場するので、それに注目。ソウルと光州を繋ぐ幹線道路はすべて封鎖されていたから、マンソプがピーターを乗せて帰る道が山道に限定されたのは仕方がない。しかし、当然それも封鎖され、検問されていたから、マンソプのタクシーは一体どうやってソウルに戻るの……？

4月29日放映の『西郷どん』のラストは、大老・井伊直弼の命令によって、いわゆる「安政の大獄」が始まる中、月照和尚を京都から連れ出して薩摩まで戻ろうとする西郷隆盛の決死の旅の始まりを描いていたが、京都から薩摩への道はすべて幕府によって封鎖され、検問されていたから、西郷は大変。本作でもそれと同じような困難の中、ある偶然によってマンソプのタクシーが検問を突破できたのは幸いだったが、その後は銃を持った私服警官の車が群をなして追いかけてきたからマンソプのオンボロタクシーはどうするの？そこで登場するのが、ラスルたち光州のタクシー軍団だ。彼らは懸命にマンソプの車を助け、私服警官の車を妨害しようとしたが、1台、また1台と銃に撃たれたタクシーは撃破されていくことに。そんな中でテスル運転手が見せた、あっと驚く決断とは・・・？ピーターが撮影したフィルムを全世界に発信し、光州事件の真相を世界に伝えたい。そんな一念にもとづく、テスルたち光州のタクシー運転手が見せる英雄的カーチェイスにびっくりするとともに、楽しいはずのカーチェイスではじめてポロポロ涙を流すことに・・・。

テスル役を演じたユ・ヘジンは、2月12日に観た『コンフィデンシャル 共助』(17年)でも、味のある顔で、味のある演技を見せていたが、本作では情に厚いだけではなく、英雄的な市民活動家としての顔を見せるので、それに注目すると共にその死にザマに合掌！

■□余韻の残る、この「実話」にも注目！■□

本作のチラシには「勇敢な韓国タクシー運転手キム・サボク氏と献身的な光州の若者たちがいなければ、光州事件の真実を伝えることはできなかった」という、ドイツ人記者ユルゲン・ヒンツペーターの言葉が載っている。ピーターは2003年の第2回ソン・ゴノ言論賞を受賞した実在の人物だし、マンソプも実在のタクシー運転手。そして、光州事件もどこまで真相が明らかにされているかは別として、実在する悲惨な事件だ。

しかし、1980年のあの時、ピーターをタクシーでソウルから光州まで乗せて行った運転手は、あえて偽名を残したため、彼の行方はその後杳として知れなかったらしい。あの時10万ウォンという高額報酬に目がくらんでピーターを光州まで乗せていったのなら、ピーターが有名になった後、「俺があの時の運転手だ」と名乗り出れば、大きな報酬と名誉が待ち受けているはずなのに、タクシー運転手は何故名乗り出ないの？そこが不思議なところだが、そんな実話がラストで明かされるため、本作は余韻のある結末になっている。

ピーターのモデルとなったユルゲン・ヒンツペーター氏は2016年に78歳で死亡したが、マンソプのモデルとなったキム・サボク氏が今も生きているのかどうかは不明。しかし、あの当時11歳だった娘はきっと今も生きているはずだ。また、父親からヒンツペーターを光州まで乗せて行った、命がけの体験談を聞かされているはずだ。本作は、それがわからないままチャン・ファン監督が実在の人物であるサボクとヒンツペーターをモチー

フとし、韓国現代史に語り継がれるあの日に隠されたもう1つの真実を解き明かした映画だが、ラストの実話が大きな余韻を残す効果を發揮しているので、それをしっかり味わいたい。

2018（平成30）年5月10日記